

体育教員における省察の可視化と研修システムの総括と今後の課題

高根 信吾¹・新保 淳²

A Summary of the Visualization of Reflection and the Training System in Physical Education Teachers and the Next Goal

Shingo TAKANE, Atsushi SHIMBO

要 旨

本研究の目的は、体育教員が自らの授業実践力の熟達化に寄与する研修システムを開発することにある。そのため、授業と授業をつなぐ省察の可視化を促すリフレクションシートを作成して、個々の教員による経験の中に埋め込まれた実践における知の可視化を進め、PDCA サイクルという視点や「しかけ」論を援用した研修システムを開発した。また、これまでの研究成果についてリフレクションシートと熟達化を関連づけながら総括を行った。本研究で実施してきたさまざまな省察の可視化は、「時間性の要求」「多角的視点の要求」に応えられている。これらの特徴が組み込まれた研修システムの実行によって、体育教員における授業実践力の熟達化が可能となる。また、今後の課題として、研修システムの有効性の検証、現実的利用可能性の追求、アクション・リサーチへの展望を挙げた。

キーワード：体育教員、授業実践力の熟達化、省察、可視化、研修システム

Abstract

The purpose of this study was to develop a training system which contributes to the proficiency of physical education teachers' class practice power. We made a reflection sheet to lead to the visualization of reflection which connects classes, revealed knowledge through practices in each teacher's experience, and developed a training system by combining the PDCA cycle with the "shikake" theory as a teaching method. We summarized this study of the effect of a review of our reflection sheet on the proficiency. The visualization of reflection satisfies the need for sufficient time for thoughtful consideration of results and a multilateral viewpoint. The training system which included these features, results in the proficiency of class practice power in physical education teachers. The next goal of this study is the inspection of the validity of the training system, its usefulness for physical education teachers and the prospect of conducting action research.

Key Words: physical education teachers, proficiency of class practice power, reflection, visualization, training system

¹ 経営学部

² 静岡大学大学院教育学領域

1. 緒言

われわれは、平成 25～28 年度の 4 年間に渡って「体育教員における授業実践力の熟達化に寄与する『省察』の可視化と研修システムの研究（研究代表者：新保淳）」という課題（課題番号 25350721）で科学研究費補助金（基盤研究 C）を受け、研究を実施している（以下、本研究とする）。この研究背景のひとつとして、現在の学校現場が以下のような問題を抱えていることが挙げられる。つまり、①「学校からの教育改革」が求められる中、反省的实践家としての教員像を現実化するためにも、これからの教員には、普段の授業実践から「授業構想（Plan）」→「授業展開（Do）」→「授業省察（Check）」→「再デザイン、授業再構想（Action）」のいわゆる PDCA のサイクルに基づいて授業実践を行う自立した教員像が求められていながら³、PDCA サイクルの中でも、C→A→P→D の時間の確保と質的な保障がないこと、②授業省察から再デザインの過程が各教員に委ねられ、他者の視点が入りにくいこと、③授業省察から再デザインの過程に対して、自らの授業実践力の向上を自覚化するものになっていないこと等の問題である。そして、教職経験豊富な教員ほど、「授業展開から授業省察そして再デザイン」というプロセスが個々の教員による経験の中に埋め込められたままで、教員の多忙化による研修時間確保の困難性などの理由により、それをアウトプットできないためになかなか可視化されてこなかったという経緯がある。この可視化されていない部分の掘り起こしを、いかに行き、それをどのようにして実行性のあるものにするかは、教員自らの課題を明確化するためにも、また、教員が自らの授業実践力の熟達化を進めていくためにも重要である。さらに、このプロセスの可視化は初任者や経験の浅い若手教師といった教職生活のスタート近辺に存在する未熟練者にとっても、大きな資源になりうると考えられる。

現在、授業研究等の研修システムにおいて、「省察」を中核とする教師の力量形成をテーマとする先行研究としては、教職大学院において「段階的省察を盛り込んだカリキュラム」論を考案し、実践する松木⁴の研究や、教師の実践的力量形成を育むために、「授業リフレクション」を支援するための方法論について述べた澤本⁵や浅

川ら⁶の研究、さらには保健体育の授業においては、岩田ら⁷の試みがある。しかしながら、これらの研究は教員養成における大学での授業を想定したものや、実際の学校教育においては、いわゆる研究授業という「特別に設定された研修の場」を想定したものとなっている。

2. 研究の目的と方法

本研究では校内研修等のような「特別に設定された研修の場」と、他方で時間的確保が困難な日常における個々の教員による授業実践との、中間に位置づけられる『少数の教員集団において活用しうる利便性が高いリフレクションシート』の作成を、また、図 1 に示すような「省察」を中核とした「授業実践」力の向上を目標にした実践を行うために、このシートを活用する研修システムの開発を試みることにした。

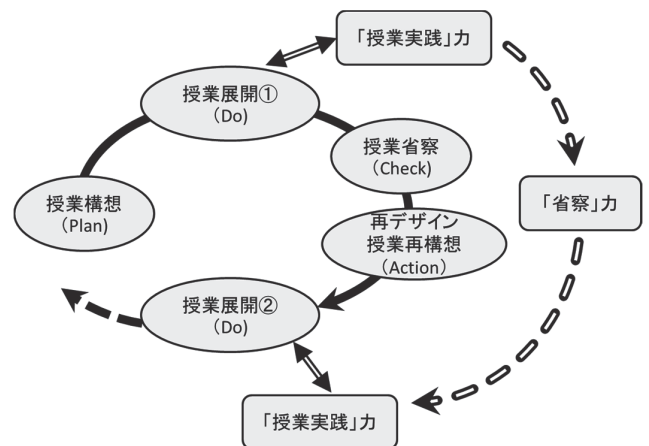


図 1. 「省察」力を視点としたその前後の「授業実践」力

前述した「授業リフレクション」に関する先行研究の中でも、実行性の点において特に優れていると考えられるのは、鹿毛の「しかけ」論である⁸。鹿毛は、図 2 に示すように、教員の授業実践力を可視化する重要なポイントを「しかけ」という視点をを用いることによって、検討

pp.3-11。

⁶ 浅川栄司、小林進、志村香代子、澤本和子、佐藤博、山田七重、若杉純子「教師の実践的力量形成を支援する授業リフレクション研究（その 2）：集団的リフレクションによる単元学習事例研究『山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第 3 号、1996 年、pp.13-21。

⁷ 岩田昌太郎、久保研二、嘉数健悟、竹内俊介、二宮亜紀子「教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討：『リフレクション』を促すためのシート開発』『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部文化教育開発関連領域』第 59 号、2010 年、pp.329-336。

⁸ 鹿毛雅治「授業づくりにおける『しかけ』」、秋田喜代美、キャサリン・ルイス『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店、2008 年、pp.152-168。

³ 塩見みつ枝「文部科学省行政説明」、三町章編『中学校（全日本中学校長会発行）』706 号、2012 年、pp.51-56。

⁴ 松木健一「学校を変えるロングスパンの授業研究の創造」、秋田喜代美、キャサリン・ルイス『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店、2008 年、pp.186-201。

⁵ 澤本和子「教師の実践的力量形成を支援する授業リフレクション研究（その 1）：授業研究演習システムの開発』『山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第 3 号、1996 年、

を加えている。すなわち、この授業に一貫して流れる教員の学習者に対する「授業目標（ねがい）」を、「ツール（教材等）」や「場（学習環境等）」という外部からも観察可能な視点とすることによって、それらの「しかけ」に対する学習者の反応（教育的瞬間）を捉えた教員は、「しかけ」を続行したり、直したり（「しかけ」直し）、予定していなかった「しかけ」を導入したり（「しかけ」化）すると想定され、それらが後の「省察」の素材になると予想される。

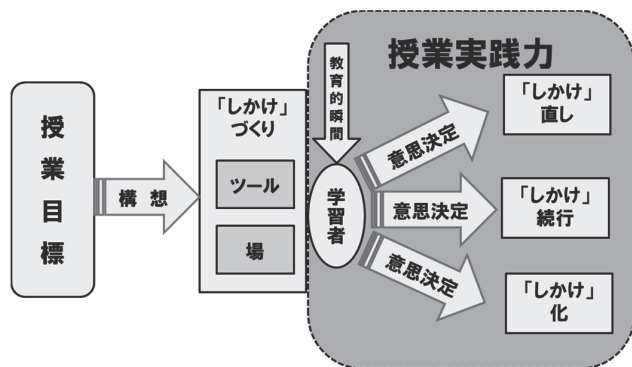


図2. 授業実践力の可視化と「しかけ」論

こうした視点に基づいたリフレクションシートを新たに開発し、それに「省察」したことを書き残すことによって、「省察」の可視化が可能となり、教員の判断力と意思決定力等について他者とともに振り返ることができるようになると考えられる。また、授業に関する「授業展開①→省察→授業展開②」の一連のプロセスとリフレクションシートを、保健体育科の少数の教員集団において「省察」を中心とした授業実践力向上のための「反省会」に用いることも想定される。例えば、教育内容別（種目等）のテーマによる「しかけ」を中心とした授業研究会や、研修テーマ別（例として、実技授業における生徒指導や学級経営等）に絞った「しかけ」を利用することによって、目的的な授業研究会を行うことが可能となる。このことは学校教育の中において身につけるべき教員の力を、それぞれの要素に絞って高めていくことができるという可能性を示唆するものでもある。さらには、現職教員によるこうした研修システムを先取りする意味で、大学における教員養成段階において、例えば、模擬授業を実践する科目の中に導入することも可能である。このことが教員として採用された後にも、教職生活全体にわたって学びを継続する意欲を持ち続けるための仕組みとして機能するならば、大学と教育委員会が連携・協働しながら理論と実践の往還により教員養成を行う、新たな教育改革の礎となることが期待できる。

本研究の目的は、保健体育科における教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのシステムを開発するこ

とにある。そこで、まずは、図3のように鹿毛の「しかけ」論から導き出したリフレクションシートの記入原則を視点として、省察の可視化を具体化する、利便性の高いリフレクションシートを考案する。そのために、体育の実技授業特有のグループ編成や練習場所、それらの活用順序等々をどのように用いるかという「場」の利用を加えることも必要となる。また、何を可視化するのかという「省察の視点」の考察も求められる。本研究ではこのような経緯からこれまでに5つの論文を発表したが、それぞれの論文は一連の研究でありながらも独立しているため、ここで一度それらを総括し、残された課題を明確にする事は得策と思われる。

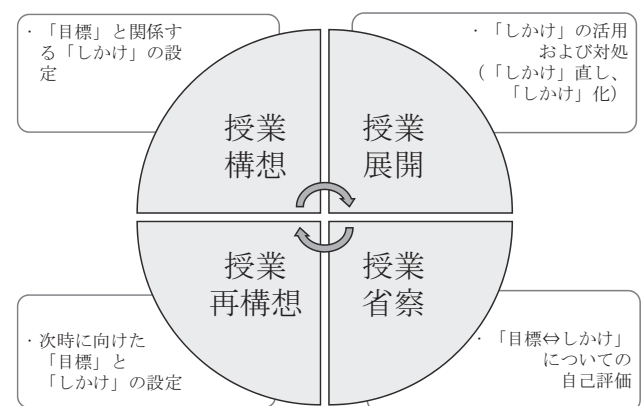


図3. リフレクションシートの記入原則

以上のことから、本稿では、本研究の目的を達成するために、まずはこれまでの一連の研究（5つの論文）を事例として簡潔にまとめ、つぎにそれらを「省察の可視化」と「熟達」という視点を持って、有機的に関連づけながら総括を行い、最後に本研究全体における今後の課題を提示する。

3. 事例

3.1.「学び続ける教員像」確立のために求められるリフレクションに関する研究（1）⁹

研究協力者の協力により小学校の体育科教育実践フィールドにおいて授業の様子をビデオ撮影し、研究協力者に対して半構造化インタビューを実施した。それによって、体育の実技授業特有のグループ編成や教具の配置、練習場所、それらの活用順序等々をどのように用いるかといった「場」の利用についても考慮された利便可能性かつ実行性の高いリフレクションシートのプロトタイプを作成した。さらに、研究協力者の協力によって、

⁹ 高根信吾、三澤宏次、新保淳『『学び続ける教員像』確立のために求められるリフレクションに関する研究（1）』『常葉大学保育学部紀要』第1号、2014年、pp.95-108。

リフレクションシート活用のための体育科における「年間指導計画の見直し」を行い、具体的には、「学年団（低学年・中学年・高学年）ごとの指導マニュアル作成」という提案がなされた。この提案は、クラス（学年）間で共有できる教場・教具の工夫や「2クラス2T（教員）」といった授業運営を設定することによって、よりリフレクションがなされやすい環境整備を目指すものでもあった。そして、指導マニュアルの一部として「低学年：『走の運動』の単元計画（走の運動遊び（10時間）：いろいろコースをつくって、あそぼう！！）」を作成、提示した。

3.2. 体育教員における授業リフレクションの可視化の方法とそれらのアーカイブ化の意義に関する研究¹⁰

教員の思考プロセスを明らかにするために、授業構想のリフレクションシートを用いて、授業構想における「予測」と授業実践という「現実」の観察結果の差異について授業者が書き込んでいく方法を提示した。さらに、保健体育科という教科における特殊性を加えた考察を行うとともに、それらの資料（シート）をアーカイブ化することの意義、体育教員の授業実践力向上に対する効果について明確化した。つまり、リフレクションシートのアーカイブ化、具体的には授業リフレクションシートを1時限1時限、1枚1枚残すことが「個々の教員による経験の中に埋め込まれた実践における知」の可視化になるということ、また、それらは初任者や経験の浅い若手教員といった教職生活のスタート近辺に存在する未熟練者にとっても大きな資源となりうるということを明らかにした。

3.3. 小学校体育科における児童の学習効果向上および教員の授業実践力熟達化に寄与するiPadの使用法に関する研究－4年生の「走り高跳び」を事例として－¹¹

研究協力者である授業者は、「しかけ」のひとつとして新たに「iPad」を導入し、子どもたちがiPadを使用することで、高く跳べたり、動きを考え、変えようとしてたり、よく話し合いをしたりする様子を捉えていた。例えば、走り高跳びでは踏み切り足の位置や角度といった運動技能に関する正しい知識を身につけさせるために、運動者だけでなく観察者にも、どこに着目させ、どこから観るべきかを気づかせたり、具体的に指示したりして

いた。このようにiPadを導入することで、授業者の授業観察の視点を再確認することができた。さらに、授業者がiPadの導入に伴って従来の授業構想を変更する様子、つまり単元計画を再構成（しかけづくり）し、実際の授業においてそれを修正（しかけ直し）しながら授業を展開する様子を明らかにした。これらの事がまさに単元レベルおよび授業レベルのPDCAサイクルの実践であり、また、このような実践が教員の授業実践力を培っていく可能性を示唆した。

3.4. 米国におけるDoctor of Educationプログラムとの比較から見える共同教科開発学の特性¹²

熟達化に対する高等教育機関からの情報を得るために、教員養成機関を持つ米国の大学の中でも、Ed.D.の博士コースを長年にわたって維持しているハワイ大学マノア校を調査訪問した。創設期のコース概要については、聖田京子ハワイ大学名誉教授に、また現在のコース概要については、コース代表であるMoniz, J. 准教授にインタビュー調査を行った。ハワイ大学マノア校において特徴的なことは、3年に一度、30名程度に入学を許可する制度を採用していること、さらに、同期入学年度の大学院生で4～5名の研究グループ（コホート）を作らせて、コホートごとに教育を行うという指導体制を工夫していることであった。日本の大学院と比較すると、入学の機会が3年間に1回しかないこと、先輩、後輩といったいわゆる縦の人間関係が築けないことなどデメリットも想定されるが、同期とのいわゆる横の関係が非常に濃厚であること、具体的には、コホートでは同じ研究目標を立て、3年計画で研究を進めていく授業形態を取り、あらゆる教育実践に関わる問題をそれぞれの専門性を探究する学生同士がそれぞれの専門的視点から討論することによって実践的な解決の糸口を求める授業展開がないうること、また、こうした仲間が修了後においても情報を交換する環境にあることが示唆された。

3.5. 体育教員における授業構想の思考プロセスの可視化に関する研究－附属学校赴任1年目のベテラン教師に着目して－¹³

研究協力者である授業者における授業構想としての学習指導案作成過程に着目し、指導案の修正内容とその修正意図を分析することから授業構想時の思考プロセスを

¹⁰ 新保淳、野津一浩、高根信吾「体育教員における授業リフレクションの可視化の方法とそれらのアーカイブ化の意義に関する研究」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第46号、2015年、pp.193-203。

¹¹ 高根信吾、三澤宏次、新保淳「小学校体育科における児童の学習効果向上および教員の授業実践力熟達化に寄与するiPadの使用法に関する研究－4年生の『走り高跳び』を事例として－」『常葉大学経営学部紀要』第3巻第1号、2015年、pp.83-89。

¹² 新保淳、高根信吾、長倉守、白畑知彦「米国におけるDoctor of Educationプログラムとの比較から見える共同教科開発学の特性」『教科開発学論集』第4号、2016年、pp.185-191。

¹³ 野津一浩、牧澤利光、新保淳「体育教員における授業構想の思考プロセスの可視化に関する研究－附属学校赴任1年目のベテラン教師に着目して－」『静岡大学教育実践総合センター紀要』第25号、2016年、pp.93-106。

明らかにした。その授業構想時の思考プロセスでは、大きな枠組みとして附属学校の研究内容についての理解に取り組む段階での思考が展開され、続いて研究内容の理解に基づいて学習活動等をイメージしていく思考が展開されていることが明らかとなった。研究内容の理解に取り組む段階では、個々の研究内容をそれぞれで検討しながら、学習内容や学習活動での具現可能性について思考が展開され、次に、研究内容の理解に基づいて学習活動等をイメージしていく段階では、個々の研究内容が連係されて検討が進み、学習内容や学習活動へ反映されていた。また、研究内容というフィルターを通して検討していくことによって、これまでに授業実践を通した経験の中で培ってきた、授業者の体育科の本質の捉え直しにつながっている可能性を示唆した。

4. 考察

当然のことながら、「プロフェッショナル（専門職）」と呼ばれる体育教師になるためには意図的・継続的な学習が必要¹⁴で、「単に教職経験を積み重ね専門職としての教師の成長がなされるものではない」¹⁵といえる。そして、教師が成長していくためには、「教職経験についての省察が不可欠」で、「省察することの価値を認めて取り組む姿勢が重要」となってくる¹⁶。鈴木によれば、「教師は、授業研究を通して実践的力量を形成してきた」のであり、「教師が授業研究に求める機能として『指導技術を向上させること』『指導的立場の者から授業評価を受けること』『体育科の教科内容を追究すること』『自己改革のため』『同僚性を構築すること』」を挙げている¹⁷。ここで、もう一度、授業研究の抱える問題について整理する。鈴木は、「授業研究の内容や運営方法が形骸化している」「教師の多忙化から授業研究に時間をかけられない」「全ての教師が授業研究に積極的ではない」というような状況を近年の授業研究の課題として挙げ¹⁸、さらに、研究授業当日までの「事前研」と研究授業以降の「事後研」にかかる時間のアンバランスさを指摘している。つまり、多忙化する教師が授業研究全般に多くの時間を割けないということに理解しつつも、重視すべき検

証作業としての事後研ではなく、事前研にかける時間の方が圧倒的に多いという点が問題となる。事後研に期待されることは、児童の学びを見つめ、立てた仮説を児童の姿で検証することでより明確な成果と課題が浮き彫りになる、そして、明確な成果は次の実践に生かすことができ、明確な課題は、次の授業研究の修正視点となるといったことである。事後研が充実しているような授業研究を通して、教師がお互い切磋琢磨しあって授業観、児童観をぶつけ合いながら実践的力量を向上させ、学び続ける教師集団が形成されていくのであり、授業の事象をある視点をもって眺め、なにをもって変容したのかを定め、その変容を「可視化」できれば、より明確な成果と課題が蓄積されるのである¹⁹。

このような問題点を改善する必要性から、本研究では、「体育教員における授業実践力の熟達化に寄与する『省察』の可視化と研修システムの研究」を課題とし、具体的には、実行性の高いリフレクシオンシートのプロトタイプを作成し、授業構想の予測と実践の現実の差異について記述するリフレクシオンシートをアーカイブ化することで「個々の教員による経験の中に埋め込まれた実践における知」の可視化を実現した。また、学習指導案作成過程に着目し、教員歴 21 年目、附属学校赴任 1 年目である授業者の 7 回にわたる指導案修正における修正内容とその修正意図を分析することで授業構想時の思考プロセスを可視化した。これらのことは、リフレクシオンシートをアーカイブ化したり、思考プロセスを可視化したりすることに直接関わる授業者本人はもちろんのこと、のちにそれを参考にすることができる教職経験の浅い教員にとっても、授業実践力の熟達化に寄与する研修システムの一部として機能することを提示した。

つぎに、小学校の授業実践に新たな教具（iPad）を導入したことで、教員歴 20 年目の中堅授業者の授業観察の視点を再確認でき、単元計画を再構成し、実際の授業においてそれを修正しながら授業を展開する様子、つまり、単元レベルおよび授業レベルの PDCA サイクルの実践を確認した。これらを確認するために、授業者への半構造化インタビューを実施し、授業者の「しかけ」の可視化を実現した。ここでみられた一連の「しかけ」は、鹿毛の「しかけ」論を踏まえれば、授業構想時における「しかけ」づくり、授業実践時における教育的瞬間を捉えた「しかけ」直しや「しかけ」続行、あるいは「しかけ」化であった。このように、「しかけ」が「省察」の素材として機能する、「しかけ」論を用いた研修システム（図 4）を提示した。

¹⁴ 中井隆司「体育教師としての成長と教師教育」、高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田靖『新版体育科教育学入門』大修館書店、2010 年、p.244。

¹⁵ 長谷川悦示「教師力を高める体育授業の省察」、高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田靖『新版体育科教育学入門』大修館書店、2010 年、p.257。

¹⁶ 同上、p.257。

¹⁷ 鈴木聡「体育科授業研究の現状と課題」『体育科教育』第 63 巻第 11 号、2015 年、pp.44-45。

¹⁸ 同上、p.46。

¹⁹ 鈴木聡「校内研究で教師はどう育つか」『体育科教育』第 64 巻第 2 号、2016 年、p.66。

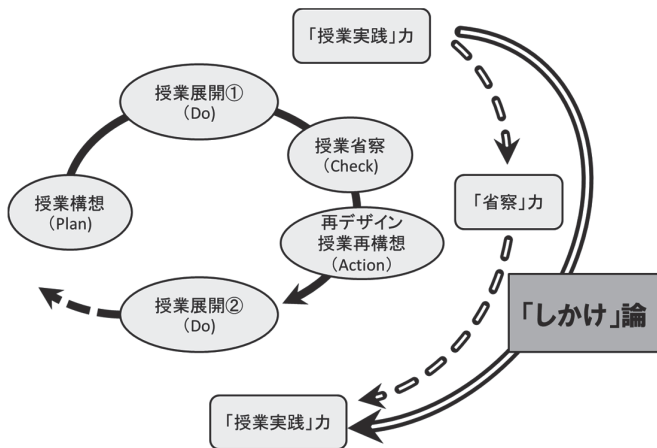


図4. 「しかけ」論を用いた研修システム

さらに、ハワイ大学の教員養成機関（大学院）では、院生たちがコホートを形成して、3年計画で、あるいは修了後においても授業および研究を進めている実態を確認した。ここで特筆すべきは、このコースでは、熟達という概念そのものが持つ「時間性の要求」および「多角的視点の要求」に応える指導体制を整備していたことである。樋口が「教師の資質・能力の熟達化」について「それは時熟でもある」²⁰と指摘しているように、熟達における「時間性の要求」は、われわれの関心事である「教員の授業実践力の熟達化」においても例外ではない。そこには即効性のある特效薬など決して存在しない。時間がかかると自覚しつつ、よりよい体育授業研究を実践するなかで、体育教員における授業実践力の熟達化を図るのである。そして、このような意図を持って実施してきたさまざまな省察の可視化は、熟達における「多角的視点の要求」にも応えるべく行われてきた。つまり、省察の可視化が、さまざまな経験知を持つ多くの教員による、それぞれの視点からの討論を可能とし、さらにそのような討論がなされることによって、授業者や討論参加者への有益なフィードバックを可能とするのである。したがって、授業研究における省察、そしてその可視化には、これまでよりも時間や労力をかけて取り組むべきであり、教職に関わる全ての人がこのような価値観を共有することが必要である。ここで取り上げてきた省察の可視化は、熟達における「時間性の要求」および「多角的視点の要求」に応えられており、それらが組み込まれた研修システムを実行することによって、体育教員における授業実践力の熟達化が可能となる。

ここからは、本研究における今後の課題について言及していく。まずは、これまでに開発した研修システムの

具体的な「有効性についての検証」である。実際の教育現場においてこの研修システムを実行していくなかで、どのような教員に対して、どのような効果があるのかなどを実証していくとともに、リフレクションシートの改良や可視化されたデータの共有方法についても検討する必要がある。つぎに、どのようにすれば現場の教員はこの研修システムを利用するだろうかといった「現実的利用可能性の追求」が挙げられる。つまり、方法論の提示にとどまらず、実際に教員がこの研修システムに接近行動を起こす契機を探る必要がある。さらに、このシステムを利用した、授業改善を教員自らが中心となって行っていく授業研究への展開、具体的には教員が自らの授業における問題点を把握・認識し、その改善策を自ら考察・実行していき、その効果を検証した上で、新たな改善策へと発展させていくというサイクルを長期的に繰り返し行っていく「アクション・リサーチへの展望」も視野に入れる必要がある。

5. 結言

本研究の目的は、保健体育科における教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのシステムを開発することであった。本稿では、この目的を達成するために、まずはこれまでの一連の研究を事例として簡潔にまとめ、つぎにそれらを「省察の可視化」と「熟達」という視点を持って、有機的に関連づけながら総括を行った。ここでは、授業構想時の思考プロセスを可視化した研修システムや、しかけが省察の素材として機能する「しかけ」論を援用した研修システムを提示した。このような「省察の可視化」は、「熟達」における「時間性の要求」および「多角的視点の要求」に応えられており、それらが組み込まれた研修システムを実行することによって、体育教員における授業実践力の熟達化が可能となる。そして、本研究全体における今後の課題として、研修システムの有効性の検証、現実的利用可能性の追求、アクション・リサーチへの展望などを挙げた。今後も体育教員の授業実践力の熟達化に資する方法論の確立に向け、これらの課題に取り組んでいきたい。

謝 辞

本研究は、平成28年度科学研究補助金（基礎研究（C））課題番号25350721を受けて実施された。

参考文献

1. 浅川栄司、小林進、志村香代子、澤本和子、佐藤博、山田七重、若杉純子「教師の実践的力量形成を支援する授業リフレクション研究（その2）：集团的リフレ

²⁰ 樋口聡「ESDの概念についてのメモランダム」『学習開発学研究（広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座）』第9号、2016年、p.11。

- クシヨンのによる単元学習事例研究『山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第3号、1996年、pp.13-21。
2. 長谷川悦示「教師力を高める体育授業の省察」、高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田靖『新版体育科教育学入門』大修館書店、2010年、pp.257-262。
3. 樋口聡「ESDの概念についてのメモランダム」『学習開発学研究（広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座）』第9号、2016年、pp.3-12。
4. 岩田昌太郎、久保研二、嘉数健悟、竹内俊介、二宮重紀子「教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討：『リフレクション』を促すためのシート開発」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部文化教育開発関連領域』第59号、2010年、pp.329-336。
5. 鹿毛雅治「授業づくりにおける『しかけ』」、秋田喜代美、キャサリン・ルイス『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店、2008年、pp.152-168。
6. 松木健一「学校を変えるロングスパンの授業研究の創造」、秋田喜代美、キャサリン・ルイス『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店、2008年、pp.186-201。
7. 中井隆司「体育教師としての成長と教師教育」、高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田靖『新版体育科教育学入門』大修館書店、2010年、pp.244-250。
8. 野津一浩、牧澤利光、新保淳「体育教員における授業構想の思考プロセスの可視化に関する研究－附属学校赴任1年目のベテラン教師に着目して－」『静岡大学教育実践総合センター紀要』第25号、2016年、pp.93-106。
9. 澤本和子「教師の実践的力量形成を支援する授業リフレクション研究（その1）：授業研究演習システムの開発」『山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第3号、1996年、pp.3-11。
10. 新保淳、野津一浩、高根信吾「体育教員における授業リフレクションの可視化の方法とそれらのアーカイブ化の意義に関する研究」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第46号、2015年、pp.193-203。
11. 新保淳、高根信吾、長倉守、白畑知彦「米国における Doctor of Education プログラムとの比較から見える共同教科開発学の特性」『教科開発学論集』第4号、2016年、pp.185-191。
12. 塩見みつ枝「文部科学省行政説明」、三町章編『中学校（全日本中学校長会発行）』706号、2012年、pp.51-56。
13. 鈴木聡「体育科授業研究の現状と課題」『体育科教育』第63巻第11号、2015年、pp.44-46。
14. 鈴木聡「校内研究で教師はどう育つか」『体育科教育』第64巻第2号、2016年、pp.64-66。
15. 高根信吾、三澤宏次、新保淳「『学び続ける教員像』確立のために求められるリフレクションに関する研究（1）」『常葉大学保育学部紀要』第1号、2014年、pp.95-108。
16. 高根信吾、三澤宏次、新保淳「小学校体育科における児童の学習効果向上および教員の授業実践力熟達化に寄与する iPad の使用法に関する研究－4年生の『走り高跳び』を事例として－」『常葉大学経営学部紀要』第3巻第1号、2015年、pp.83-89。

